

個々の生徒に即した生徒指導の可能性について  
—多様化・個人化の進行の中で生徒指導を考える—

筑波大学附属駒場中・高等学校 生徒部

小澤富士男・遠藤 正之・小沢 治夫  
加藤 裕司・更科 元子・寺田 恵一  
根本 節子

## 「個々の生徒に即した生徒指導の可能性について」

### — 多様化・個人化の進行の中で生徒指導を考える —

筑波大学附属駒場中・高等学校 生徒部

小澤富士男 遠藤正之 小沢治夫 加藤裕司

更科元子 寺田恵一 根本節子

#### 要旨

本年度は、昨年度に実施した「本校生徒の生活意識調査アンケート」や、本校における生徒指導の事例などを通して、本校生徒のより細かな内面風景にせまりながら、個々の生徒に即した生徒指導の可能性について報告を行った。内容としては、1の「何が起きてきたのか」の中で、最近起きている事例の多くに、通常の社会常識からは理解がなかなか出来ないものがあり、仮に、規制軸としての社会軸及び人格軸と個人の性向として現われる暴力への傾向度を示す3つの軸を設け、捉えてみると、規制軸としての社会・人格の軸に病理が見られ、それが、従来の常識では捉えられない最近の特異な傾向を生み出しているのではないかと考えた。それでは、規制軸としての社会形成や人格形成に大きな影響力をもたらす学校に、今何が起きているのかを考えたのが、次の2の「階層化と個人本位社会の中での教育」の内容となっている。以上の1と2の現状分析に従いながら、本校で起きてきた幾つかの事例を通して、3の「全体への指導の中で」と4の「個々の生徒に即した生徒指導の可能性について」で、学校機能の維持あるいは強化の方向を探り、多様化・個人化の中での生徒指導の可能性についてのあり方を考えた。最後に、今現在本校で試行的に行われている「ピア・サポート」について、これからの学校教育を考えていく上で、一つの指針ともなる興味深い試みではないかと考え、本年度行われたその内容についてのあらましを示した。

キー・ワード：17歳 学校機能 個人化の中での教育 ピア・サポート

#### 1、何が起きてきたのか

昨年度「本校生徒の生活意識調査アンケート」を行い、アンケートのまとめと分析を通し、本校生徒の生活意識や学校生活における生徒の行動傾向を、ある程度捉まえることができたのではないかと考えている。内容については、昨年度本校「研究報告」にも掲載した。本年度は昨年度に実施した「本校生徒の生活意識調査アンケート」や、本校における生徒指導の事例ないにかられる教員は、日本全国に数多くいるのではあるまいか。今、起きている出来事は、或る学校だけの特殊な出来事ではなく、日本の学校のどこでも起きる可能性を秘めた出来事である。1997年の「神戸の少年」の事は、多くの人々の脳裏にまだ生々しい記憶として息衝いていると思うが、一少年の犯した特異な犯罪として、すましてしまうにはすまじきれない、現代の青

少年が共有する社会病理現象としての側面を持っていたことを、実は多くの教師は感じていたのではあるまいか。1998年『文芸春秋』三月号には、神戸の少年の検事調書が掲載され、その反響の大きさの中で、『文芸春秋』四月号は「何が読み取れ、何を考えるべきか」とのテーマで、いわゆる識者の論文を掲載しているが、『学校崩壊』の河上亮一氏は次のように述べている。「少年Aの行動基盤に最近の中学生がある、と考える方がどを通して、本校生徒のより細かな内面風景にせまりながら、個々の生徒に即した生徒指導の可能性について報告を行う。

それにしても、「今年もまたか…」と言う、絶句せざるを得ない青少年犯罪に関するセンセーショナルな出来事が、連日と言えれば過度な表現になるが、報じられ続けている。「うちの学校でなくてよかった」と言う思

---

*Research on the possibility of guiding students based on the individualities*

いいことに気がつく」、河上氏はこのように考える根拠として、この十年の生徒の示す傾向として、以下の事柄を挙げている。①やりたいことを我慢することが非常にむずかしくなっており、他人にどのような影響を及ぼすか考えて自分を抑えることがなかなかできない。②自分のやりたいことは何をやってもいい、悪いのはすべて他人であると正当化する傾向が強い。③自分が好きなことをやっているとき、やめさせられるとすぐにムカつき、相手が弱ければ猛烈にくってかかり、時には暴力まで振るい、相手が強ければ自分の殻にこもり、憎しみを抱え込む。④自分が何かやる時の「理由」はあまりなく、やりたいからやり、おとなしいと見える生徒でもカッとしてわけがわからなくなり、もの凄く暴力的になる。⑤社会的規制がほとんどなくなっており、どんな犯罪を犯しても刑務所行きにならないことを知っている。以上の最近の生徒に見られる傾向を挙げ、上記のように分析している。とは言え、神戸の少年については、河上氏も、「絶対的な自分の世界をつくりあげており、外部世界の規制力は、ほとんど彼の内面の欲望を抑える力にはなっておらず、自分の思いどおり外の世界を支配したいと思っており、それを冷静に実行している。少年はすでに自我を完全に確立した存在と言っていいだろう。学校の枠で納まる存在ではなく、少年法で考えるべき存在ではないかと感じた」とも述べており、事件全体としては非常に特異なケースだと考えられている。

確かに、報道される一連の事件に、今の若者全般に共通するものがあると言うふうに普遍化することはできないが、しかしながらその行動基盤に、現代の中・高校生が抱え込む共通なものがあることは既述した通り否めない。最近も、14歳の少年が12歳の少年を金槌で殴るという事件があったが、その動機を14歳の少年は「神戸の少年と同じことをして注目されたかった」と述べている。また9月に入って直ぐに起きた高校生が教員の首筋を刺した事件では、当初「漫画を読んで注意されたのでカッとなってやった」と自供していたが、その後の警察の取り調べで、「幼い頃からいじめられ、恐喝されてきた知り合いから、逃れるために少年院に入ろうと思ってやった。刺す相手は誰でも良かった」と供述している。その動機と行動とは一般的な常識では理解しがたいと言えるのだが、位相を変え、別のもっと違う捉え方、例えば「社会・心（人格）・暴力」とでも言うような相から眺めると、もう少し別の見方が出来るのではないだろうか。事例は何でも良い、我々教員のそれぞれの学校で起きた、或る出来事でも良い。同じ状況下では、普通は暴力に向かわないケー

スなのに、何故暴力の行使が行われたのだろうかと考えてみる。社会化された常識を通して眺めれば、暴力を振るうことに葛藤が存在するはずなのに、彼らの中でのそのような行動をとることに精神的な葛藤はあまりなく、自然な行動としてその行為が行われている。通常であるならば、社会の規制力が働き、人格的な面からもその暴力的な行動に抑制がかかり、「もしかすれば、殺人に繋がったかもしれない」と己れの行為を自問し、その行為に恐れ慄く己れが存在すると言った精神的葛藤があるはずである。ところがそのような行動を抑止すべきものが育っていない、と言うよりも、そういうものがないのではないかと推測される。別の言い方をすれば、自分・家庭・社会の規制軸が働き、「殺してはいけない」と言う意識の下に、暴力の抑制がかかるはずである。と言うのは、大抵の社会はその社会を成立させる最低の条件として、殺人の禁止を刑法等で明示するはずであり（但し暴力の禁止と言ってもそれは社会内部に対してであり、戦争や死刑を含む絶対的禁止ではない点は考慮を要する問題である）、個人としても、家庭の教育や学校教育を含む地域の結びつきを通して、うまく人間関係を取り結ぶことを学んでいくはずである。が、しかし殺人等の暴力的な行動をとった当の少年にはそのような規範意識が確立しておらず、心の奥底に潜む幼稚性とその行動のむごたらしさがむしろ人格の中で均衡して、あまりに自己本位と言える幼稚性故に、実は残酷な一連のエスカレーションを呼んでいることが伺える。社会の規範が、あるいは学校の教育が、家庭の教育力が、当の少年の人格形成に影響力をもたらしてはいないと言う現実を認めざるを得ない。社会にしても、家庭にしても、地域にしても、そして教育にしてもその影響力を行使することができない背景には、社会そのものが病んでいるとしか言い得ない現状がある。

犯罪学者などは、最近起きている「凶悪な少年事件」の背景に、かつてあった反社会的な性格や反社会的人間像よりも、非社会的性格や非社会的人間像があることを指摘する。つまり、社会的な行動規範や社会意識が育っておらず、家族や友人に対して非親和的で、自己の確立の上から、家族や友人は自己同一化の対象とはなりえず、むしろ、家族や友人が、不満が蓄積した場合のはけ口とさえなる。しかも暴力の対象が、自分よりも弱い立場の者であればあるほど執拗なものとなる。親和的な関係や共感を伴う自己同一の関係が自覚されていないため、暴力的な行動は、「きれる」という言葉以外、なかなか説明がつかない。最近のこども達の行動には、なにかしらの不快感に赤ん坊が突然に泣

きだすのと似た行為があるのかもしれない。もっとも、社会的な行動規範や社会意識が育ってはいないと言う幼児性だけでは、すべての説明がつくはずもなく、既成事実の前での無力感、家庭や学校崩壊に見られる権威の喪失、地域社会における連帯感の消失など、最近のこども達の様相については、様々な文脈からの説明と社会的分析がより詳細に必要である。次の「2、階層化と個人本位社会の中での教育」の中で、出来るかぎり説明したと考える。

例示してきたものは、ほとんどの人間にとって一生の間に出会うことのない例外的な出来事なのだ断じることができるならば良いのだが、冒頭述べたように、けして我々の日常と無関係なものではなく、共通の基盤、共通の接点を持っているものである。極端な言い方をすれば、大人の社会が壊れかかり、家庭の枠組みが壊れかかり、学校が壊れかかり、そしてこどもが壊れかかっているという日本の現代状況を背景に、センセーショナルに報じられれば報じられる程、一層日常化していく過程を、我々は目撃しているとも言える。「殺してみたかった」と言って学校帰り主婦を殺した事件、まるでそれに連鎖したように起きたバスジャック、普段からのいじめに近い人間関係が金属バットでの母親の殺害へと駆った事件、報じられた事件内容は普通の人間の感覚や常識では、あまりに陰惨であり理解を越えたものであるが、このような社会病理的な現象が当たり前となり、いつか社会病理でもなんでもない、いわば病理の日常化とでも言える状況が現出してくることを個人的には恐れる。

こどもに「何故人を殺してはいけないのか」と聞かれ、答えることが出来なかった母親の話が新聞に投稿され、それが社会的な反響を呼んだが、そもそもそう言うことをテーマに、一夜かけて語り合うマスメディアのあり方が、社会と個人の関係がいかに調整不可能となっており、いかに希薄なものとなっているかを証している。護送船団的な日本のシステムが崩壊し、個人と個人の関係に急速に収斂していく中で、今こども達に何が起きているのか、出来る限り明らかにされなければならない。明らかにされればされる程、我々が直面している状況が何であるのかが見える。今こども達に起きていることを冷静に分析し、明確にしていこう義務は、「学校社会」に生きる我々教師もまた負っているのだと、改めて感じている。

## 2、階層化と個人本位社会の中での教育

今、教育の中で何が起きているのか？ 公教育に携

わる者にとって、この問いは恐ろしく深淵で、解答するのが恐ろしく難しい気がする。「深淵で解答するのが恐ろしく難しい気がする」と言うのは、本当はかなりのことが判っているのだが、そこから先は、現実の重しに、語る気がしなくなるという意味ではあるが…。

「学校の荒れ」が社会的に問題になり始めた1980年代初めは、高度経済成長時代に縮小した所得格差が反転し、拡大していく時期とも重なる。当時は平準化が進み、「一億総中流時代」とも言われていた。しかしそれ以降、階層化は着実に進行し、政策的な後押しもあり日本社会に格差と階層化がもたらされていった。バブルの発生とその崩壊により、健全な社会を作って行こうとする中堅層の意欲は急速に低下した。1999年6月7日の「朝日新聞」社説は、「格差と階層」を取り上げ、「国際比較の上からも、わが国の平等精神はもう存在しない。日本の所得分配は不平等に向かっている」との「日本の経済格差」（橋本俊詔京大教授著岩波新書刊）からの一節を冒頭に引用し掲載している。もっとも、学者の間には、「階層」をめぐるは今も論争が存在しているが、この間行われてきた社会学調査に従えば、戦後日本社会の階層化傾向は高まっていることは否定出来ない。確かに、1970年代の終わりから1980年代にかけて、何故学校が荒れ始めたのかは、階層化だけでは語れない、戦後社会の変遷の過程で起きた深い内容を持つ問題だと考える。「村」的な風景を帯びた地域社会は急速に質を変えていく。会社中心社会の中で市場化と機能化は着実に進んでいたし、テレビドラマ「岸辺のアルバム」に象徴されるように、家族も大きく変化していく。一億総中流意識の幻想化の中で進学率も高まり、塾へ通うこども達も増えていった。そのような急速な変化の底流には、何よりも豊かさの浸透を通じた自由化と個人化の流れがあった。そして気が付いた時、いじめや校内暴力などの荒れた学校が姿を現す。伝統的な「学校」と言う枠組みではなかなか支えられないものが現われてきたのだとも言える。あえて言わせてもらえば、この20年から30年の間、公教育を中心に戦後ずっと維持されてきた「学校のシステム」が、実は市場化と（それに伴う）階層化の波に絶えず洗われ続け、学校自体も格差による再編が行われていたのだと言える。

階層化傾向は教育の中にも深刻な影響をもたらした。「教育」は、階層間移動の「はしご」であり、階層再生産の道具であるが、しかしその「教育」が、現実にはしだいに上昇志向の高い層の手段となっていった。極端な比較をすれば、こども達の将来を担保するために塾へ通わせられる層はせっせとこどもを塾へ通わ

せ、崩壊した家庭ではこどもは街に放たれることとなった。或るこども達は「学校は適当に過ごす場であり、勉強は塾で」と考え、或るこども達は学校の勉強についていくことができなくなる。そのような社会状況の変化の中で、多くの層が交じり合う公教育の現場では、相変わらず平準化と平等化の論理が働き、「一生懸命勉強すれば誰でも出来るようになるんだ」との生徒への言葉は、しかし空まわりする。学校間格差は大きくなり、いわゆる教育困難校では、授業を聴かず大きな声で喋り続けるこどもに負けないように声を張り上げる教師の声は、虚しく空気の中に流れていく。「静かに」と注意すると、今まで大声で喋っていた生徒が「話してなんかいいよ」と平然と教師を威圧するように答え、また大きな声で喋り続ける。しかも、戦後確かに存在していた、個人と個人とを結んでいた、敗戦体験と復興体験という「共同体験」もしだいに消失し、戦前から一貫して培われてきた「公」的なものを重要視する考え方も社会の中でその存在を失い、市場化と機能化の進行の中で、個人本位社会が現出して来る。法に対する規範意識も、自己本位の中でしか意味を持たなくなる。自己本位が当たり前の社会では、誰もが自己本位を中心に振る舞う。そう振る舞うことが当たり前であり、法を犯したとしても罪の意識は薄い。だがそのような時代状況の中でも、公的な役割を絶えず担い続けなければならない学校の現場では、学校は社会であり続けなければならない、「公的なもの」を失う訳にはいかない。「協調性」「他者との共感」「公明性」「公正感」「学校社会への積極的な参加」「努力」などを基軸に学校社会は永々と築かれてきた訳で、それを簡単に手放すことはできないし認められもしない。「公的なもの」の意味が価値を失いかけていく中で、「公的なもの」を維持しなければならない苦しい現実がある。しかも、全面的委ねられてきた生徒の生活指導の場面にも、家庭が介入し、ごねれば得をする風潮が学校にまで日常的に持ち込まれ、民事的な係争関係にさえ学校は直面する。

1980年代後半以降、「学校」はマスコミなどを通して、度々批判されてきた。いじめ、自殺、体罰、登校拒否、学校管理の強化などが、マスコミなどが「学校」を語るキーワードとなった。「それならば、マスコミから吐き出されるバーチャルな世界が、真に築き上げなければならない世界を仮想へと限りなく遠くへ追いやっていく現実を、マスコミはどう自己釈明するのか」という思いを抱いたのは私一人ではないはずだ。マスコミなどからの学校批判に対して、多くの教師は耐え、荒れた教育環境の中で、日々の学校の仕事に就くこと

しかできなかったのが現実であった。

かつて、「学校」には、一人の人間が良識のある人として成長していくために必要な重要な機関であるとの、社会的な期待が存在していた。地域も親もそのような学校の役割を認めてきたし、学校を支えてきた。しかし、何かことあればセンセーショナルに報じ、事実の重みを商品化し擦り切れさせていくマスコミ報道や現実と適応しない教育政策などの前に、「学校」（文部省も含めて）は敗北していく。「学校」は教育を行う機関としての権威性を失い、「ゆとり」の教育課程による度重なる改定は、ついには学力低下問題へと今日行き着いたとも言える。社会学者が十年ごとに協力して行う、社会階層と社会移動を調べる1995年の「SSM調査」によれば、学歴も所得も職業威信も高い「上層一貫」層が調査人数比で23%、逆の「下層一貫」層が15%、両方合わせると38%、上下層の一貫層が前回調査よりも増え、しかも親の職業との相関性が增大していることが示されている。過熱した受験競争と偏差値重視の教育が悪の権化として語られ、「ゆとり」を軸にした教育課程の度重なる改定は、いつか気が付いた時には、皮肉なことに、かえって学校間格差を助長し、日本社会の階層化に大きな寄与を果たしていたと言える。

「市場と個人」を中心とし、機能化と都市化として展開する現代社会状況の中で、「コンビニ」、「カラオケ」、「ケイタイ」、「パソコン」、「ゲーム」は、こどもの心の中に深く浸透している。大人が作ってきた風景がこどもの感性を形作り、自分達が吐き出す罪悪を省みることない大人の論理は、こどもの論理となっていく。個人を基軸に、自分の欲求を満たすためならば何をしてでもかまわない個人本位社会が着実に社会全体に浸透し、こどもは自分の欲求が満たされない場合には、他者への恨みや心のストレスを重ね、絶えず周りの視線を気にしながら、それにも疲れると周りの世界を遮断し始める。「ストーカー」と言う言葉が、いつの間にか定着してしまっているが、欲求が満たされない人間の欲求を満たそうとする自己本位的な行動形態が、「ストーカー」行為だとも言える。1970年代前半までならば、まだバーチャルで仮想的であった世界が、今は真実味を増している。現在、アメリカでは次の大統領の席をめぐる、ゴアとブッシュの間で激しい選挙戦が繰り広げられている。2000年9月26日の朝日新聞は、その選挙戦を次のように報道している。「ブッシュは『教育不況』と言う新語を編み出し、ゴアは『教育改革』を公約の第1に掲げている。両陣営がそろって『公教育の荒廃』を指摘する。公立学校を救う方策として、今アメリカの教育界が議論しているのが、『学校券』と

『チャーター校』である。『学校券』は、私立校に通う子の学資を公費で親に補助する制度である。この『学校券』をめぐるのは、『貧困家庭でも私立か公立か学校を選択できる』や『生徒を私立に奪われて公立の教育レベルは一段と下がる』などの意見が交わされている。『チャーター校』というのは、父母や教師が自治体から特別の許可（チャーター）を得てそれぞれ理想とする教育を実践するのが『チャーター校』である。しかしこの『チャーター校』にも市場化の波が寄せている。フリードマンという経済学者は『アメリカの小学校と中学校は行き着くところまで行き着いてしまった。再建するには競争原理を導入するほかない』と言うが、ブッシュもまた競争原理の導入を主張する。しかしアメリカにおいても国民の80%以上が公教育の必要性を認めている。以上の内容の新聞報道に見られるように、アメリカの公教育の現場では、日本よりもはるかに「学校崩壊」が進んでいる。市場化の中に公教育をそのままに放置すれば荒廃につながっていくのはあまりに自明なことである。フリードマンとは対極に立つ公共経済学では、市場化すれば多くの人々に不幸あるいは不利益が及ぶものは、基本的には政府の仕事で行うべきだと考える。純粋公共財はまさにその典型であるが、教育もまた政府の仕事の分野に入っていくものである。結論から言えば、競争原理の導入は、教育も含めた様々な財やサービスの偏った分配に繋がり、社会全体として見れば非常に不幸な結果を招くことになるだろう。今、日本で起きていることは、市場化原理が絶えず働く現実の中で、「公教育」の理念や役割が風化し壊れ果てていく様を、いつか公教育が復活するかもしれないと期待しながら目撃するという、非常に悲劇的な状況なのではないかと考える。

### 3、本校における全体指導の中で

「自由・闊達な校風のもと、挑戦し、創造し、貢献する生き方をめざす」を学校目標とする本校では、いわゆる校則というものは数少ない。とは言え、本校で守らなければならないものを、昨年度末改めて整理し、「新入生への担任からの話」の資料として配布した経緯がある。このようなものを作成し、本校での過ごし方を自覚させようとしたのも、規範意識の低下と学校の中に「街」が入り込んできているのではという危惧からであった。そして昨年度本校で初めて履物検査や寸借指導なるものを行ったのも、本校生徒にモラル・ハザードが生じてきているとの認識からであった。また生徒部では「本校生徒の生活意識調査に基づくアン

ケート分析」を行い、中・高6ヵ年における生徒意識の変遷や学校生活を送る際の問題点について考えた。昨年度の研究報告でも「①入りの問題 ②学校生活の中で ③高校における入りの問題」という内容で述べているが、ここでその概要を改めて挙げてみよう。

#### ①入りの問題

それぞれの環境で優等生であったこどもの、本校への適応・不適応という従来からの問題だけではなく、自己本位傾向を強く持ったこどもが出現しており、罪とは何か、暴力を振るうことが何故悪いのか、周りとうまくやっていくことが何故大事なのか、そんな基本的な事柄さえ本当の意味で解らないこどもが存在してきている。規範意識が、大人もこどもも欠落してきている現代状況の中で、他人の目の及ばない場面では著しく倫理意識が後退し、時に陰湿な行動をとることがあり、生徒指導の中で核心に入ろうとすると心の扉を閉め、硬質な表情をつくる。入学に際して母子一体で勝ち得た現実があり、トラブルに家庭が前面に出てくる可能性が高くなっている。燃えつき症候と呼ばれる症状を示すこどももあり、勉強不適応、学校不適応へと到る場合がある。以上の可能性を持つこども達をいかに学校システムに同化させ、その学年の雰囲気がいかに形成させていくのか、発生する様々な「入りの問題」というハードルをうまく越え、学年経営を速やかに行うことが必要となっている。

#### ②学校生活の中で

中・高にかけての6年は（一部は高校3ヵ年）、一人の人生から眺めてみても、思春期特有の多くの動揺と不安を内包する時期でもある。しかも、中・高6ヵ年一貫という学校システムは、変容していく実に多様な人格を混在させて、学校を成立させるという離れ業を成し遂げるしていくものでもある。この6ヵ年の中で、クラブ活動や学校行事が、生徒の自己実現の上で大きな役割を担っていることは、十分に認知して良いことだ。しかしながらそのようなクラブ活動や学校行事においても新しい傾向が現われてきている。人間的な気持の繋がりである「共感」を軸に、人間関係を作り出していくことは非常に重要ではあるが、クラブや学校行事において、現実とその機会を提供するのは難しくなっている。「クラブ」や「クラス」を核に連帯を図ることよりも、「個人」を関係の軸として構成される人間関係の方が多くなっている。自己本位的な人間関係では、一見矛盾するようだが互いの関係や距離の持ち方を強く意識し合い、他者感覚を常に抱いた人間関係が形成されていく。利害、関心、興味を軸に人間関係が形成され、他者が自分の精神的内側に入り込まない

限りの付き合いになりやすい。しかもそのようなインフォーマル・グループが多数存在し、そのどれかに属することで、クラスや学年あるいは学校の中で、安定を得ようと努力する。「個人」を関係の中心軸とするため、クラブやクラスのためと言う論理は余り機能せず、それを強調することは、むしろクラブやクラスからの離脱の機会さえあたえかねない。「共感」を関係軸として成立させる困難さは、我々の実際の社会に現に存在しており、現実には機能していない「共感」や「連帯」を学校社会の中で強調するあまり、「個人的な」微妙なずれやトラブルが、生徒にとっては大きな躓きとなり得る可能性を持つ。③高校における「入りの問題」

従来から、新に入学する高校入学者と内部連絡進学者の融合をうまく図ることが、大きな課題となっていたが、ここで言う高校における「入りの問題」とは、大学入試は高校入学とともに始まるという現実を背景にした問題である。高校入学と共に始まる3年間が大学入試を最終の目的とする限り、目的通りの大学を目指せない生徒にとって、希望からの離脱という問題が絶えず起きてくるし、目指す大学との境界に位置する生徒にとっても絶えずストレスを感じる日々を過ごすことになる。教師はそれぞれに希望を持たせようとして努力し、学校への帰属を高めようとする。しかしそれでも、絶えず離脱への機会は生徒に訪れてくる。しかも「中学での入りの問題」を引きずっている場合、いかにして希望の再構築を行うのか教師にとって一層難しい課題となる。生徒も希望を見いだそうと苦しみことになるが、学校との帰属意識を失いながら、「浮遊感覚」・「他者感覚」を抱きながらの学校生活となっていく。

以上が昨年度の研究報告でも記した分析結果としての概要である。ところで、全体指導について述べるならば、マスとして生徒集団を一律に捉え、指導をしていけばどうにかなるといふ代物ではなく、上記の概要の中で記した生活指導上現われるかもしれない様々な諸問題を考えながら、学校生活をいかに生徒に円滑に行わせていくのかを、基本として行われるものと言える。しかしながら、言うまでもないことだが、そこに当然のこととして難しさが存在する。全体に対する規律の強化も時には必要となってくるが、基本的には個々の生徒への目配りを出来るかぎり行い、出来るかぎり個々の生徒との人間的な繋がりを持つことで、全体の指導にも大きな意味を与えることになる。その意味で本校生徒の実態については、絶えずその分析が必要であり、それらの分析や日常的な担任団の精力的で献身的な生徒との繋がりが、本校の学校社会あるいは学校文化を高め、全体指導の新しい可能性を

開かせることとなると考える。

ここで、一つの事例を挙げて上記の話の補足とした（ここでは、プライバシーへの配慮からきわめて抽象的に細部を省略して話をする）。もう10年以上も前になるが、昼食の後の集会時、生徒が整列をしている時、一人の生徒が一学年下の生徒に対して脅迫に近い暴言を吐いたことがあった。ひどく興奮した生徒を押さえ、落ち着かせた後、「何故そのような暴言を吐いたのか」尋ねると、意外な答えが返ってきた。暴言を吐いた一学年下の生徒に対しては何の恨みもないと言う。実は日頃から格好良さそうに、偉そうに話をしている同学年の複数の生徒に腹を立て暴言を吐いたのだと言う。事の真相はこうであった。その日の昼休み時間代議員会があった。文化祭で揉め、一学年下の生徒の巧みな言論に、上級生の自分たちがやりたい文化祭の取り組みができなくなっていく。だが、一学年下の生徒に、同じ学年の、日頃から優秀とされ格好良さそうに振る舞っている生徒が何も反論できない。暴言を吐いた生徒はオブザーバーとして代議員会に出席していて、何も発言が出来ない同級生に対して憤りをしだいに覚えていった。その憤りが集会時の一学年下の生徒に対する暴言と繋がっていく。周りの同級生達に対し、「君等は日頃偉そうに言っているけれども、肝心なときに何もできないじゃないか」という思いに駆られながら、暴言を吐いていたと言う。事例として、たわいないものと言われればそれまでだが、一人の生徒が何かの行動に駆られた背景には、改めて深いものがあることをその時感じた。つまり、自分たちが毎日相手にしている生徒の心の中は、深い、時には思いもしない心の動きがあるものであり、そのような心の動きを察しながら、しかも、そういう生徒を相手に全体指導が絶えず行われる訳であり、時に集団にとらわれない細かな対応が必要ではないかと考える。自分たちの指導がどこまで有効性をもつかについては、絶えず不安にかられているが、指導の空洞化をもたらさない配慮が常に必要とされる。

ところで、上述したように、生徒個人に関する細かな目配りが、今後全体指導においても、より一層の現実性を持ってくると考えられるが、しかしながら、当然のことながら、全体指導に関わって重要な意味を持つのは、「学校」と言う機能であり、もし「学校」がその機能を低下させているとしたならば、その機能をいかにして上げていくのかと言う問題を考えたい。先程、本校入学時の問題として「入りの問題」を挙げたが、中学1年の担任になると、入学時、新入生のこども達を学校という機能を十分に利用して本校に適應さ

せていくように努める。入学後直ぐに控えている「水田耕作」「校外学習」「音楽祭」などを利用しながら、生徒の持っている問題性や可能性を「表」に引き出し、問題の解決や、本校で今後6ヵ年間やっていける自信などを獲得させていこうと努める。こうした努力を通して、本校に対する生徒の帰属意識のすり込みや適応を図っていくことになる。当たり前のことだが、我々の日常的な教育活動は絶えずこの「学校機能」を前提に、しかもそれを利用しながら行われている訳で、もしその機能が失われているとしたならば、全体指導の面でも個人指導の場合でも、「学校」のもつ有効性は発揮できず、指導は困難なものになっていく。

もっとも、今現在起きていることは、全国的にその「学校」が本来所有していた機能を失い、機能しなくなっていったり、あるいは全般的な「学校崩壊」が起きているということなのであるが、本校において、「学校」機能を今後如何に活かしていくのかは、やはり、既述したように、個々の生徒への目配りを出来るかぎり行い、出来るかぎり個々の生徒との人間的な繋がりを持つことに帰着するものと考えている。そして、それが「学校」機能を利用した、全体の指導の有効性にまた繋がっていくこととなる。

ここでのテーマの最後に、「希望」「共感」を軸に、学校の中で「教育」を行う可能性について提言したい。今後、親や地域そして学校とが連携しあって、理想的な学校創りが希求されていくことは、一つの大きな可能性となり現実化していくであろう。例えば、アメリカの「チャーター・スクール」も、日本における理想的な学校創りの一例になるかもしれない。そして理想的な学校創りに並行して、恐らく学校は、地域に対しても、親に対しても、卒業生に対しても、あるいは様々な機関に対しても、一層の開放性を要求されるだろうし、また開放をしていかざるを得ないだろう。多分そのような試みの中で、今学校が失っている「希望」や「共感」軸の教育的な再生もありえるかもしれない。そのような親や地域そして学校とが連携しあった理想的な学校創りが以外にも、実は様々な試みがありえるかもしれない。まだ具体的なイメージまでは至っていないが、例えば、同じ学校の一角で、「希望」「共感」を軸とした「教育」の存在が常設され、確保される機会があったならば、それは一つの非常に意味ある教育へと発展するかもしれない。例えば、今本校で行われている「ピア・サポート」もその一つになり得るかもしれないと考えている。(ピア・サポートについては「5、ピア・サポート」で詳細に報告する。)

#### 4、個々の生徒に即した生徒指導の可能性について

「共感」「連帯」「希望」「公正」などの軸を通して、生徒と対応していければ良いのだが、現実にはそのような関係軸で接していくのが困難な状況が存在している。特に生徒指導が必要になる生徒の場合、「共感」「連帯」「希望」「公正」などの関係軸を通して接していこうとするのだが、まさに指導の上で重要な、「共感」「連帯」「希望」「公正」そのものを受け入れるさせることが困難な生徒とぶつかる。勿論、「共感」「連帯」「希望」「公正」などを、指導の軸として語ることも自体が、実はあなたの学校の幸福度をしめしていることなのと言われるればそれまでだが、その議論はここでは保留するとして、とにかく生活指導の場で出会う生徒の心の中には、「共感」「連帯」「希望」「公正」からは遠いものが占めている。占めている中身は、かつての「いじめ」体験であったり、本校における人間的関係の希薄さだったり、「希望」からの離脱だったりする。しかもそういうものが、当の生徒の自我の一部を構成しているため、指導は長い時間をかけてゆっくりやっていくものとなる。しかしながら担任にしても、生徒部の生活指導係にしても、ただでさえ忙しくなる日常の中で、長い時間をかけたゆっくりした指導はしたいのは山々だが、現実には出来かねるという実情が存在する。しかも、学校というシステムの中で、当のこどもに密着した指導は、返って悪い結果を招きかねない場合もある。学校のシステムの中で解決出来る問題であるのならば、当然学校のシステムを利用して解決すれば良いのだが、時に、生徒にとっては緊張から開放された、学校外の別のシステムとの連携を通した指導が必要となってくるケースが当然ある。

そして、最近の傾向として、学校のシステムの中で指導できるものと、外部のカウンセラーと連携をはかった方が良いものとの境界上に、指導対象の事例となる事柄がかなり起きてきているのではないかと言うのが実感である。このことは、生徒の心の中が非常に錯綜してきており、しかも現代社会を反映した錯綜感が、そのまま人格形成と向かっていることに基因する。先程の言葉を再び使用するとしたならば、規範意識が、大人もこどもも欠落してきている現代状況の中で、大人が作ってきた風景がこどもの感性を形作り、自分たちが吐き出す罪悪を省みない大人の論理は、こどもの論理となって進行する状況があるのではないかと考えられる。当然指導にあたって、幾つかの選択肢が存在し、その生徒に必要な手段やプログラムがとられてい



くのが良いに決まっているが、本校の中で現実にそこまでのシステムは確立してはいないし、はたしてそのようなプログラムが出来るかどうかとも怪しい。今現在は、現実にあった事例を積み重ねながら、苦い体験の中から、個々に対応した指導の可能性を模索しているというのが実情である。事例としてその幾つかのケースを紹介してみよう。

ある時、或る出来事で或る生徒に、「君にとって心の許せる友人はいるの」と問い掛けて、「そんなもの居るわけがないじゃないですか」と答えが返って来たケースがあった。そのはきすてるような答え方と答えの中身に、心の中に潜む虚無的なものと、この子がここまで育ってくる過程の或るものを感じた。当然、指導は日常的な行動を共にしながら、彼の硬質な心の殻を一枚一枚開き、語り合っていくのが良いに決まっているのだが、はたしてそこまで教員が引き受けて良いのか、引き受けることはできてもかえってマイナスになるのではないのかとの思いが働いた。このケースは外部のカウンセラーと連携しながら、日常的な生徒の行動を教員が絶えず見守るという指導がとられたと記憶している。

またある時、或る出来事で或る生徒から、「本当はこの学校には来たくなかったのです。別の専門学校のような所に行きたかったのです」と言われ、彼の中のこの学校との帰属意識の遠さを感じた。帰属意識のない中での指導は現実には形式だけのものとなり易く、当然彼の中での帰属意識をどのように高めたら良いのかという指導が要求されてくるのは分かっていたが、現実に取り得る方法は従来通りの指導内容であった。そしてその指導に付随して、彼の本校への帰属意識を出来るかぎり高めるために、彼の小学校あるいは中学校時代から彼の現在を構成するまでを、彼と一緒に辿らせ現状を確認させたり、本当に彼が考えるような専門学校への進路断念が本校への帰属意識の希薄性につながっているのかについても考えさせた。この時も基本的には担任を中心にした指導が行われた。しかし、そのような指導に有効性があったかどうかとなると疑問は残った。もしかするとこれまでとは全然尺度の違う指導が実は要求されていたのかもしれない。例えば、一度学校を出て社会で働き、もし再び戻りたいなら戻れるというような。現状では、当然そのような対応は行いようもなく、彼の中の勉学や学校からの逃避的な傾向を是正出来たかどうかとなると疑問であり、それ以上の学校システムの変更を伴う対処の仕方は難しかった。

またある時、或る出来事で或る生徒から、「どうして

そのような行動をとったのか」の質問に対して、「かつてのいじめられ体験といじめ体験が、記憶の中で蘇ってきた」との返事が返ってきた。実は、今年度本校保護者による生徒意識のアンケート調査が行われたが、その中の「かつていじめられた体験があるか」との問いに、「ある」と答えた生徒は中学・高校共に30%位を占めた。また「いじめに加わったか」との問いには、「ある」と答えた生徒は高校で40%、中学で30数%を占めていたが、過去の「いじめ・いじめられ」体験に起因する心の傷が、生活指導上の事例ばかりか、戯れあって遊んでいる日常の場面でも、顔を現わすことが結構多くなっている。「いじめ・いじめられ」体験に起因する別の生活指導でぶつかった生徒の場合、その生活指導の中では反省を示しながらも、いじめに関する別のアンケートで、「この世界はきれいごとではすまされなく、いじめに強くなる免疫をつけなければならぬ」と、彼の本当の心では考えていることが分かった。彼は、日常的に振るわれたいじめに対し、最初は正当防衛であったかもしれないが、逆に相手に対して暴力を振るうことで克服していったと言う経験を公立時代持っていた。彼の場合は、普通の話し合いで済むことが、感情面の激高へとつながり、威嚇的な行動になってしまったが、彼の心の内側の中からは「現実はなかなか言っただけでは変わらず、現実世界の中で暴力が合理化される場面があるのでは」との認識は、これから先もけして消えるものではないのかもしれない。

以上、幾つかの事例を紹介したが、生活指導に現われてくる問題の背景には、個人の生育歴に係るものが多く、何故そのような行動をとってしまうのか丹念に調べることで、当の本人が直面している適応困難な問題等がある程度見えてくると考える。上記事例でも述べたが、個人の抱える問題をでき得るかぎり明らかにすることで、その問題に対する本質的な対処の方法がいつでも明確に提示し解決ができるとは考えないが、しかし出来得るかぎり背景を詳細に知ることによって、指導のある程度の方向性は浮かんでくる。しかも、最近の傾向として、こどもの指導に親が介入してくる可能性が増しており、親への説明が求められるケースが多々あり、詳細な背景構造の掌握が一層求められるようになっている。かつては全体に対する指導を中心に学校教育が行われていたが、個々人のそれも内面に直結する分析と対処が、最近の傾向としてますます要求されるようになってきていると言える。最後に、個々の生徒に即した生徒指導の可能性に関連して、もう一つの問題について考えてみたい。それは、筑波大学学校教育部のカウンセリング室が行っている「メンタル・

ヘルス」調査や、本校保護者によるアンケート調査にも現われてきた、本校生の心の問題である。調査によれば、本校生の場合、他校生と比較し、精神的に「引きこもり傾向」や「自殺傾向」が高く見られるとのことである。保護者の調査よれば、自殺を考えたことがあると思った生徒は中学生で20%、高校生で27%、これは同種の全国調査の中学生の13%、高校生の16%と比較して高い傾向を示している。背景には、絶えざる競争の問題や、知的意識の中に潜む死への誘いの問題などがあると考えられるが、いずれにせよ本校生のメンタル・ヘルスをいかに上げていくのかは、大きな課題となってきた。しかもそのような「メンタル・ヘルスの減少問題」が生徒指導とからんでくると、学校からの離脱や死のほめかしを時に従い、指導は非常に難しくなる。現在の所そのような問題への対応としては、保健室指導や、学校教育部との連絡を取りながら、カウンセリング指導を行っていく方法がとられているが、現実にはその解決はなかなか難しく、問題を解決しないままの卒業や、学校からの退学となるケースへと繋がっている。ここでも、先程紹介した「ピア・サポート」などが、本校教育の場における「希望」や「共感」軸形成に発展し、生徒が「希望」や「共感」を軸とした教育活動に自然に参加していければ、それが生徒のメンタル・ヘルスの回復へと繋がっていくことと考える。その意味で、「ピア・サポート」などの機会を学校教育の場に、設けていくことは課題となっており、個人的には「総合的学習の時間」などで「ピア・サポート」などが実現出来ればと考えている。

#### 5. 保健委員会におけるピアサポート活動

中高生の子どもたちは、発達の上でも、思春期という自己と向かい合う不安定な時期であり、同時に友人関係や成績の悩みなど、多くの時間を過ごす学校という場に関係した悩みも大きくふくれ上がる時期でもある。子どもたちが問題や悩みを抱えたときに相談するのは、親や教師よりも友達が選ばれているというのは各種の調査結果からも明らかになっている。このことを考えると、思春期にいる子ども達自身がサポーターとして、お互いの問題の解決を援助していけるようなシステムを作ることには生徒の学校生活において有効であると考え、より、保健委員の生徒を対象にピアサポート講座を開始した。

##### (1) ピアサポートとは

Peer = 年代を同じにするという意味で、身近な仲間、生徒同士、教員同士、Support = 援助、支援という意味で、悩みや問題を抱えて困っている人

を身近な人間が支えていこうとする活動である。

発祥はカナダで、自助を基本とし、生徒がお互いに助け合えるようにと始められた。1979年から生徒の訓練が始まり、カナダ全土の高校・中学校・小学校に発展した。現在はアメリカやイギリス、オーストラリア、アジアなど世界的に広がりがつつあり、学校だけではなく職場や地域、障害者等様々な活動に発展している。カナダにおけるピアサポート活動は、一般に約50時間という長い時間をかけてこれを実施しているが、日本の学校では、これほど長い時間をこのような活動に削くことができないのが現状である。

##### (2) ピアサポート活動の実際

大学の相談室と連携して行っているメンタルヘルス調査や生徒指導部で実施した「生活意識調査」等からも、生徒への精神面への援助は必要不可欠であり、生徒援助の一つの具体策として、生徒保健委員会による支援体制を作ることを目的にピアサポート活動を開始した。

ピアサポート講座では保健委員の生徒が、クラスや部活動等で悩みや問題を抱える生徒に対して、peer (仲間)として親身になって耳を傾け、対応するという経験をとおして「他者との違いに気づき、他者に対してより受容的になり、他者に対して尊敬を深める」という保健委員自身の対人関係能力の向上と、周囲に気を配ることによってお互いに助け・助けられる関係をつくることによって学校全体に人を尊重するという雰囲気を作られるという二つの効果を期待している。

ピアサポート講座の内容は、思春期の支援ニーズ、ピアとしての役割、自己理解や他者理解、コミュニケーション能力の向上等がはかれるように、また知識としての理解だけではなく、実際の場面でピアサポーターとしての行動がとれるように演習を多く取り入れた。

##### (3) ピアサポート講座の対象と内容

①高校生：1・2年生の各クラス2名の保健委員16名

②中学生：各クラス2名の保健委員18名

高校保健委員に対しては、4月末～6月末までの木曜日に7日間、放課後1時間を使って実施した。また、ピアサポート活動の定着とピアサポーターへの支援をするために2学期、3学期に各一回フォローアップ講座を設けた。

毎回の講座の内容は表のとおりである。

実施日	実施した内容
4/20	オリエンテーション、関係作り、傾聴と自己開示
4/27	悩みをもった人を援助するために、思

- 対人援助
- 5/25 エゴグラムによる自己理解
- 6/1 オープンクエッション、問題解決のしかた、支援と救助の違い
- 6/8 エゴグラムでわかった自分の個性を関わり方に活かす
- 6/22 ピアサポートの事例検討、まとめ
- 10/5 聴き方訓練、ピアサポート活動報告、今後の活動計画
- 1/11 聴き方訓練、ピアサポート活動報告、今後の活動計画

員の生徒に対して講座への出席の促しが行われたが、一方で校外学習や合唱コンクール前という枠組みの中での講座開設であったために、HR活動の時間延長で参加できないクラスが出たり、塾やクラブ活動との関係で特定の生徒の欠席がみられるというデメリットもあった。

(4) 高校ピアサポート講座終了後の生徒の感想  
ピアサポート講座終了後の高校生の感想は表のとおりである。

高校保健委員会におけるピアサポート講座はHRのある木曜日に設定した。これにより担任から、保健委

	ピアサポートの趣旨	自分のこれまでのコミュニケーション	ピアサポーターとしての援助方法
わかったこと	人間関係の大切さ・重要性 援助を必要とする人がいる 自己分析ができた	相手を傷つける会話をしてきた 相手の気持ちを考えずに話すことが多かった。	具体的な援助方法や手段 他人との関わり方 解決策を自分から出してはいけないこと 縁の下の力持ちのような役割ならでき
今後何が できる か	他人の気持ちを考える 気ないフォローをする	聞き上手を目指して人の話を聴く 相手の状態に合わせて話を聴く	HRで険悪なムードの時に何か言う

高校生はアンケートの結果から、対人援助や接し方の方法がわかり、自分が今まで友達に接してきた態度をこの講座を受けて振り返ることができ、友達の気持ちを考えて関わろうとする姿勢がみられた。

(5) 高校ピアサポート講座終了後のフォローアップ講座から

ピアサポート講座が終了して3ヶ月後に開いた2学期のフォローアップ講座では、ピアサポーターとしての活動報告やピアサポート講座の意義等について話し合った結果、次のような意見が出された。

講座終了後の各自の活動と今後の活動計画は表のとおりである。

サポート対象者	ピアサポーターとして今までにできたこと	今後の活動計画
友人	日頃から相談を受けることが多い 機会がある毎に積極的にスキルを活用する	今後も友人の相談に応じていく 友人の悩みに応えていく
・クラスで孤立 気味の生徒・今 まで話したこと のない人・周り と話さない人	p.c持っている人やウエストポーチを 持っている人など関わりを必要とする生徒や 孤立気味の生徒がクラスに2-3人はいるが 具体的には何もしていない	近づき方、声のかけ方に注意 して話しかけていきたい 今まで学んだことを活用して 話しかけていく  積極的に接していく
悩みを持つ人	具体的には何もしていない	悩みを持つ人はその人なりに何らかの合図 を出していると思うから、積極的に話を聴い ていく
部活の仲間	怪我をした仲間に対して励ま しの言葉とか気持ちを楽にさ	相手に対して接し方に気をつけて関 わるせ るように心がけた
生徒全員		みんなに優しくしていく

実際の場面では、部活動で怪我をした仲間に対して、励ましの言葉とか、気持ちを楽にさせるように心がけた、日頃から友達関係の中でピアサポートに似ているような相談を受けることが多いのでこれからもそれに応えていきたい、のようにすでにピアサポートを意識して関わっている生徒がみられた。

また、ピアサポーターとしてPC（パソコン）を持って人やウエストポーチをしている人、のように具体的な生徒に対して関わりを持とうと考えている他に、孤立気味の人がクラスに2-3人はいる、周りの人と話をしない人がいる、等ピアサポートを必要とする生徒がいるという認識はあるが、具体的な対応にまではいたっていない。さらに自分自身の友人には特にピア

(6) 高校ピアサポート活動の定着について

高校ピアサポート活動の定着については次の表のような意見が出された。

対象者	なぜ（必要性）	どのように（方法）	どうする（手段）
友人・家族		自分で	ピアサポートの存在を教え、誘っていく
友人・生徒 学校全体	<ul style="list-style-type: none"> <li>・悩んでいる人は窓口があっても相談にくるわけではないので傍にピアサポーターがいることが重要。</li> <li>・ピアサポートはやさしい人間だったら当然のこと、誰でもできるようにしなければならない</li> <li>・ピアサポートは当たり前前のことで、今まで育ってきた中で学んだことだが、わからないまま育った人には教えることが必要</li> <li>・ピアサポート活動をやっていることを知っている生徒が少ない</li> <li>・ピアサポートがどの程度実用的で効果のあるのか認識が定着していない</li> <li>・このプログラムを受けた人が少ない</li> </ul>	授業・テーマ学習	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ピアサポーターの絶対量をふやす → 授業で行う</li> <li>・生徒に体験させる</li> <li>・基本的道徳について教育する</li> <li>・羨ができるような親になるように教育する</li> <li>・成長過程で教える機会を増やす</li> <li>・ピアサポートがどの程度実用的で効果のあるものが認識させる</li> <li>・ピアサポート活動をやっていると意識を高めていく → より吸収しやすくなる</li> </ul>

<定着に対する意見>

- ①友人や家族にもピアサポートの存在を教え、誘っていききたい。
- ②前々から心理学に興味があったので勉強してみたい。

サポートが必要な生徒はいないと思っている生徒が大半であった。

ピアサポート活動の今後の取り組みについては、例えば集団で話していたわいもない話で盛り上がっている時でも悩んでいる人はその人なりに何らかの合図を出していると思うからそういった視点で話を聴いていきたい、友達が悩んでいそうだったら近づき方や話しかけ方に注意して話しかけたい、友達の悩みを聴くなど機会がある毎に積極的に活用していきたい、今まであまり話をしたことがない人や周りの人と話をしようと思わない人も機会を見つけて接していきたい、みんなにやさしくしたい、等ピアサポーターとしての意識は持っていた。

- ③本当に悩んでいる人は窓口を作っても相談に来る訳はないので、悩みを持った人の友達にピアサポーターがいることが重要である。そのためにはピアサポーターの絶対量を増やすことが必要なので、授業で扱うの

がいい。

④ピアサポートを授業で教える。

⑤授業か何かの機会を作って多くの生徒に体験させる。

⑥テーマ学習を利用するのもいいと思う。

など、自分自身がピアサポートをより深く学ぼうとする姿勢(①②)や、授業で取り上げていくのが良いとする意見(③④⑤⑥)が多数みられた。

⑦ピアサポートはやさしい人間だったら当然のことだ。それが誰にでもできるようにしなければならない。優しい人間を増やすという訳ではないが、基本的道徳について教育すればピアサポートにつながっていく。

⑧ピアサポートで学んだことは当たり前前で、今まで育ってきた中で少しずつ学んだことだと思う。それがわからないままに育った人には教える必要があるだろうが、成長過程で教える機会を増やすべきだ。親の躰も非常に重要だが難しいので、躰ができる親になるように今の子どもを教育すべきだ。

⑨ピアサポートの必要性については感じていても、それがどの程度実用的で効果のあるものか認識が定着していないので、認識の点から変えていく必要がある。

⑩保健委員会でピアサポート活動をやっていることを知っている生徒が圧倒的に少ない。みんなの意識を高めることでより吸収しやすくなる。

⑪学校内でピアサポートのプログラムを受けたのはごくわずか。今後学校全体に、さらには他校にもこの活動が広がっていくことを願っている。

(⑦⑧⑨⑩⑪)のように全校規模に、さらには他校にもと言う意見が出たのは、ピアサポート講座によってその意義が認識されたととらえることができるのではないかと考えている。

⑫ピアサポートそのものが今の一般的な高校生には距離があるように思う。「ノリ」が違うような気がした。

という意見からは、導入に使ったゲームやロールプレイング等に対してある種の照れや抵抗があったことが推察されるが、受講中の生徒の活動状況や毎講座終了後の指導者間の評価では照れや抵抗、ノリの悪さは感じられずおおむね好評であった。

#### (7) 中学ピアサポート講座

中学保健委員に対しては発達段階を考慮して、2学期の始めに集中講座として6日間開講した。9月12日は休校のため日程が順延になった。

毎回の講座の内容は表の通りである。

実施日 実施した内容

#### (8) 中学ピアサポート講座終了後の生徒の感想

中学ピアサポート講座終了後の生徒の感想や課題は次の表の通りであった。

9/4 挨拶ゲーム、悩みを持った人を援助する必要性、援助の手順、宿題  
9/5 自己紹介ゲーム、上手な聴き方、援助上手は援助され上手、宿題  
9/6 エゴグラムによる自己理解、自己理解に基づく関わり方  
9/7 関わり方、聴き方のロールプレイング

9/12 問題解決のしかた、支援と援助の違い

9/21 ピアサポートのまとめ、今後の活動にむけて

10/3 フォローアップ講座  
2/ フォローアップ講座

尚、中学生にはプログラムに合わせて、実践力を養うための課題を与えた。

「課題1」はピアサポート講座開設中毎日、「課題2」は相手を変えて2回以上とした。

\*「課題1」=話しかけの実行

これまでクラスの中でまったく話したことがない人、または最も苦手としている人に挨拶をし、2ターン以上の会話をして記録する。

\*「課題2」=「援助上手」は「援助され上手」

①家の人に肩たたきをして貰う

・気持ちよく、長くしてもらえるように言葉かけや態度を工夫をする

<実践例>

・気持ちよいことを伝えられるように表情をよくしたり、言葉を使った。

・やってくれた相手は気持ちよさそうだったのでやりがいがあったということだった。

・親にやって貰うのは気が引ける、年上の人にやって貰うのには抵抗があった。

・ありがとうございます(親に対して)。あとで代わるからといってやってもらった。

②身近な人に肩たたきをして貰う

・気持ちよく、長くしてもらえるように言葉かけや態度を工夫をする

<実践例>

・注文を付けて相手の気を引こうとしたがなかなかうまくいかなかった。

気づき	自分自身の変化	今後の課題
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ピアサポートは必要</li> <li>・重要</li> <li>・話すだけでよいとは意外であった</li> <li>・相づちはとても話しやすくなる</li> <li>・癒される</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人間としての価値があった</li> <li>・話がしやすくなった</li> <li>・友達の見方・接し方が変わった</li> <li>・相手の反応をみて話ができるようになった</li> <li>・周囲に気を配るようになった</li> <li>・オープンクエッションを多用して話すようになった</li> <li>・話しやすい場所と雰囲気を作るようになった</li> <li>・知らないうちに変わっていくかもしれない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・機会があればやりたい</li> <li>・人が悩んでいたら声をかけたい</li> <li>・会話を増やしていきたい</li> <li>・友達をたくさん作る</li> <li>・いろいろな人と接点を持つ</li> <li>・相手に頼られるようになりた</li> <li>・習ったことを習慣づけたい</li> </ul>
		<p>ピアサポートの定着について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>生徒全員に講義を受けさせるべき</li> <li>生徒会の新聞に載せる</li> <li>各校に広めていく</li> </ul>

<終了後の感想>

- ①ピアサポートは必要だと思う、重要だと思う
- ②話すだけでもよいというのは意外だった。話すのは得意分野だから結構楽しかった。
- ③人間としての価値が上がったように感じた。
- ④いやされる。
- ⑤自分自身の変化はないと思うが、知らないうちに変わっているかも知れない。そのうちに変化があると思う。
- ⑥最初はとても大変そうに感じたけれど、後で話しがしやすくなったと感じた。
- ⑦少しだが今までよりも周囲に気を配るようになったと思う。
- ⑧相づちを打つのはとても話しやすくなることがわかった。
- ⑨なるべくオープンクエッションを多用して話すようにしている。
- ⑩相手の反応を見て話ができるようになった。
- ⑪友達の見方が少し変わった、接し方が変わった。  
などピアサポートの意義や方法が理解でき、友人関係においてある程度実践されている様子が伺えた。
- ⑫今後も機会があればやりたい。
- ⑬話しやすい場所と雰囲気を作る、ピアサポートの機会があるかないかは重要。
- ⑭人が悩んでいたら声をかけたい。友達をたくさん作る、いろいろな人と接点を持つ。
- ⑮まずは周りとの会話を増やしていきたい。小さなことから始めていこうと思う。
- ⑯相手に頼られるように努力したい。

- ⑰習ったことを習慣づける、忘れないようにする。
- ⑱保健委員だけとはいわず、筑駒生（教師を含む）全員に講義を受けさせるべき。
- ⑲生徒に対し講習会を行う。
- ⑳各学校で広めていく。
- とても難しいが定着させたい。生徒会新聞にのせる。  
(⑫⑬⑭⑮⑯⑰)のように、今後ピアサポート活動に取り組んでいこうとする姿勢がみられた。さらに(⑱⑲⑳)のようにピアサポートの定着や発展のために講習会や広報活動を展開することを期待する意見が出された。
- 親が甘やかせて苦勞をさせないからこんなものが生まれたのだと思った。ピアサポート活動が必要なくなればきっといい世の中になるに違いない。
- ピアサポートは結構難しい、人を助けることの難しさを感じた。
- 自分はピアサポート活動をしたいと思わない。  
(○○○)のようにピアサポート活動に対して消極的な意見や感想があったが、これらの意見を出したのは3年生で、本人自身講座への出席率が悪く、演習にも意欲的に参加できなかった生徒であった。
- (9)まとめ  
高校生に対しては3学期のフォローアップ、中学生に対しては2学期・3学期のフォローアップが完了していないが、高校生はアンケートの結果や第1回目のフォローアップ講座の結果から、自分が今まで接してきた態度をこの講義を受けて振り返ることができ、友達の気持ちを考えて関わろうとする姿勢が培われていた。従って、フォローアップを除いて7日間という

短期間であったが、互いにサポートすることの重要性は伝わったのではないかと考える。また、このフォローアップ講座では、すでにピアサポートを意識して実践している生徒がいることが確認できた。さらに保健委員（ピアサポーター）としての今後の具体的な取り組みが話し合われた結果、ピアサポート活動の定着のためには保健委員だけではなく、授業や講習会等で、一般の生徒に対してもピアサポートを教えていく必要がある、等の意見が多く出された。保健委員会のピアサポート活動については、高校では生徒自治会役員がフォローアップ講座に特別に参加したり、保健委員会のピアサポート活動に興味を持った一般の生徒がピアサポート講座に特別参加するなど、ピアサポート活動は本校生徒にとって興味を持てる活動であるということがいえる。また、ピアサポート活動が中学生徒会・高校自治会広報紙に特集号として掲載されるなど多くの生徒の関心が得られたが、このことによりクラスや部活動等における保健委員（ピアサポーター）の活動が認識され、保健委員の役割が重要になっていくものと思われる。

中学保健委員の生徒に対しては、まだフォローアップ講座は持たれていないが、講座終了時の感想からは、中学保健委員会として中学1年生から3年生までの生徒を対象に講座を開設する場合、発達段階を考慮し、指導内容をさらに検討して、全員の生徒が理解でき、かつ意欲的に参加できるようなプログラムの開発が課題であると考えている。

学校としては、高1の学年保護者会でピアサポート活動について話をする機会が設けられた、生徒指導協議会で報告された、生徒指導部教官から生徒会や自治会への働きかけが行われた、等教官によるピアサポート活動について共通理解や応援態勢がとられた。また担任教官からは保健委員の生徒が「クラスで欠席がちな生徒に対してサポーターの役割をとってくれた」、「ホームルーム活動で生徒同士が険悪なムードになった時に保健委員が仲裁役を果たした」等の情報提供があった。

今回は中高保健委員を対象にし、保健委員の役割として開始したピアサポート活動であるが、ピアサポート活動は生徒の対人関係能力の向上やメンタルヘルスの向上について有効であると考えられるので今後もピアサポート活動が定着するように活動を続けていきたい。